

(続紙 1)

京都大学	博士（地域研究）	氏名	山尾 大
論文題目	現代イラクにおける政治変動とイスラーム主義運動 ーダアワ党の組織展開と思想変容をめぐる実証的研究ー		
（論文内容の要旨） 本論文は、現代イラク政治を対象として、特にシーア派系のイスラーム主義運動の諸組織に焦点を当て、近代国家としてのイラクの政治変動、イスラーム復興、ナショナリズムを結びつけながら、その実態を明らかにするものである。 序章では、論文全体の趣旨、目的などを概観した上で、先行研究が人工国家論や静態的なモザイク社会論、ナショナリズム研究偏重などの問題点を有していることを指摘している。 第1章では、ナショナリズムとイスラーム主義の研究をめぐる認識論的・方法論的な問題点を明らかにし、新しい類型化の試みをおこなっている。 第2章では、中東におけるイスラーム主義運動の史的展開を概観し、本論文が取り上げるイラクのシーア派系の運動がその中でどのように位置づけられるかを明らかにしている。 第3章では、イラクに近代国家が成立した過程と、そこにおいてシーア派宗教界およびそのネットワークが大きな社会的役割を担っていたことが、イスラーム復興の背景として分析されている。 第4章では、現代イラクのほぼすべてのイスラーム主義運動の源泉と言うべき高位法学者ムハンマド・バーキル・サドルについて、ダアワ党設立における役割やその政治理論である「法学者の政治指導」論の内容などを明らかにしている。 第5章では、1950～60年代の黎明期におけるダアワ党の成立・活動、バアス党が政権を握って以降のイスラーム革命を志向した時期の同党の活動を描いている。特に、革命的な志向を強めていく過程が重要である。 第6章では、革命運動の失敗、サドルの処刑を経て、ほとんどの幹部が海外に亡命するに至った時期のダアワ党について、やがて生じた分裂とその原因を含めて詳細に論じている。 第7章では、ダアワ党を含めた亡命期のイスラーム主義諸党派が結成したイラク・イスラーム革命最高評議会に焦点を当て、その意義を分析するとともに、その後ダアワ党が袂を分かつに至る思想的な対立について、一次資料などから丁寧に再構成している。 第8章では、隣国イランで成功したイスラーム革命が、サドル亡き後のイラクのイスラーム主義運動にどのような影響を与えたかを、法学者による政治指導をどのようにとらえるかという政治理論上の対立と合わせて、明確にしている。また、サドルの思想的継承者としてのファドルッラーの位置づけをおこなっている。			

第 9 章では、1990 年代のイスラーム主義運動の実態について、ほぼ革命への展望がなかった「ディアスポラ期」として明らかにしている。この時期は、イラクに対する国際的な干渉が強まったため、これらの運動も国際的な対応性を増したことが特徴となっている。また、イスラーム主義にも遠隔地ナショナリズムの要素が加わったことが明らかにされている。

第 10 章では、イラク国内に残っていた法学者であるサーディク・サドルの役割、思想、大衆動員について、亡命諸組織との対比しながら、分析が加えられている。サーディク・サドルがシーア派のイスラーム化に果たした役割は大きなものがあった。

第 11 章では、2003 年のイラク戦争以降に、帰国したダアワ党、イラク・イスラーム革命最高評議会などが総選挙や政権に参加する中で、どのように変容したかが実証的に論じられている。

結論では、論文全体を総覧した上で、ナショナリズムとイスラーム主義をめぐる理論的な問題についてまとめている。

(論文審査の結果の要旨)

イラクは、農業資源と地下エネルギー資源の両者を有する点で、中東地域における屈指の地域大国であり、研究上も国際的な注目を集めてきた。しかし、親西洋的な王国として独立した後、1958年の共和革命を経て、1968年にアラブ民族主義のバース党が権力を掌握してからは、その政治研究はもっぱら民族主義の観点からなされてきた。イスラーム政党が重要性を持つことは、2003年のイラク戦争によって独裁政権が倒れ、ダアワ党などが政権を担うようになってから、ようやく認められるようになったにすぎない。しかし実際には、1950年代末からイスラーム復興が始まっており、60年代以降、さまざまなイスラーム主義の政党や組織が発展してきた。この面は、民族主義を重視する研究動向のため、長らく空白となっていた部分である。本論文は、その空白を埋めるべく、非常に多岐にわたる一次資料を用いて、大きな研究上の貢献をなしている。

本論文の学術的な貢献は、以下の4点にまとめられる。

第一に、イラクのイスラーム主義運動に着目することによって、これまで国際的にも研究上の空白となっていた部分に、貴重な知見を加えた点である。膨大な資料とデータによって、ダアワ党、イラク・イスラーム革命最高評議会、その他の党派について、その史的な組織展開や思想の内実をめぐって、詳細な研究をおこない、イラク政治研究を大きく質的・量的に拡張した。申請者は、すでに国際現代イラク学会をはじめとする国際的な舞台で発信を多々おこなっているが、本論文の全体的な成果も、英語化して発信することが望まれる。

第二に、この研究をおこなうために、非常に広範に資料収集を行い、これまで入手不可能であった一次資料を数多く取得し、その一部を公刊したことは、きわめて大きな貢献と言える。特に、地下活動をおこなっていた時期のダアワ党の機関紙などを集め、それらを丁寧に読解、解析して、研究成果につなげたことは高く評価される。

第三に、前項で触れた一次資料のほかに、きわめて多くの党幹部、組織関係者などから聞き取り調査をおこなったことも、重要な貢献につながっている。イラクは、2003年までの独裁体制、それ以降の悪化した治安状況などによって、臨地研究がおこないえない状態にある。申請者も、2003年にごく短期の訪問をした後は現地での調査ができず、もっぱら周辺国およびイギリスなどで聞き取り調査を行なった。このような悪条件にもかかわらず、ありうべき最良の人的ネットワークを形成して、十分な情報の収集をなしえたことは、本論文の信頼性を非常に高いものとしている。

第四は、理論的な面での貢献である。従来のイスラーム主義の研究では、汎イスラーム主義と一国的なナショナリズムが対抗する傾向がしばしば指摘されてきた。本論文では、それに反する現象がダアワ党を中心に生じていることを明らかにした上で、イスラーム主義とナショナリズムの関係を4つに区分して、なぜダアワ党がイラク・ナショナリズム的な要素を強めたのかを考察している。このような一般化・理論化の試みは、中東におけるイスラーム主義研究、ナショナリズム研究に大きく寄与するも

のである。

以上のように、本論文は現代イラク政治についてこれまでにない新しい知見と考察を加えたものであり、中東地域研究において大きな貢献をなすものと高く評価できる。

よって、本論文は博士（地域研究）の学位論文として価値あるものと認める。また、平成 22 年 1 月 27 日、論文内容とそれに関連した事項について試問した結果、合格と認めた。